

中村素堂

さあ行きましょう、と平均五十キロか六十キロですつ飛ばして二時間、昼過ぎてお腹の方も空いて北山というころにえらく獣の多くいる町の真つただ中に車が停まり、左の窓下にも右の窓側にも尻が糞だらけな牛馬が立ったり寝たりしている。ラクダが少しの荷を載せてゆつくりと通る。こんどは背に瘤のある牛が来る。ロバの幌馬車が来る。

その間に人間が狭まって通る。両側の店舗には空き箱や古い椅子に腰かけて、ほんやりとどこかを見ている老若男女、ちよつと車から出てみようと思つても、ドアのガラスに顔をくつつけるようにして外国人であるわれわれを半裸の子供たちがたかつて見ている。これがビハールという町の銀座通りの光景。

あんまり蒸し暑いので、少し窓をあけると。ムーツと鼻孔を襲つてくる獣の臭い。ムジナの小便に似た悪臭で呼吸困難——イヤー、大げさなんてとんでもない。それに大型の蠅が混入して流れこむ。よく見ると馬の尻、牛のまぶたも蠅でびっしり。ソーツと息を殺して待っている、昼めし代わりらしくて運転手の総代？ とガイド君などがミカン、バナナを抱えてきて、窓から各車に配つて来る。

まあ皮をむいて食べるものですから心配はないでしょう——と、空き腹には代えられないのでおそろおそろみな食べている。

ひとつも英文のものも見当たらない原色の強烈な看板。獣類とそれに挟まってとろんとしている人間、臭気を蒸気でふかしているようなビハールの小休止。

出はなれてマンゴウの老並木道へかかつて、象が荷を搬んでくるのに逢う。またラクダも来る。だが空気は本當にうまくないので助かる。そして行けども行けども平坦なる道路。起伏もなく人家もなく見渡す限り菜の花と茶いろの穂をつけた草の大群落。整然と残っているこの草は一体何に使うのかと、農家があらば屋根を見るが決して草葺き屋根は見当たらない。

ずーつと後になって気がついた。この草を刈取っている男、それを載せてゆく牛車の青年が、みなよくこの茎を嚼んでいたの、ああ砂

糖黍なのだど合点したが、それにしてもインドの脛のように細い、栄養不良な黍なのにまた一驚。

三時近くになって、青年釈尊が苦行の地に近いガヤの駅の食堂に腰かけて、おそい午餐にありついた。

ターバンに髭のボーイ君が運んでくるカリイライスは、名高い辛いライスだが中に入っていた青い唐辛子みたいなものの辛さ。カリイに数倍するヒリヒリとかで、金魚みたいに一たん入れたものを吐き出したものが二、三人。それでも絶対この国では生水は飲めない。正宗の空き罐みたいなものに詰めた湯ざましで我慢することになる。

二階食堂から見たガヤの駅は珍しくレンガの塀をめぐらし、門のある構えになっている。斜め向かいには小高い丘が見え、あるいは有名なガヤ城の古址ではないかとも思うが、みんな不案内の集まりでガイドも歴史的な知識はゼロに近いんだから、想像だけが勝手に空まわりする。

さらに疾走、まさに暮色のせまるころ、ブツダガヤのレストハウスの門内へ車が滑りこんだどたん運転手君はその庭の芝生にごろりと身を投げ出して寝ころぶ。疲れ果てた——という態。ありがとうよ、とこちらは合掌。

レストハウス——ちよつと気のきいた名称だが、自炊宿みたいなもので、建物の外観の割りにはホコリっぽく、それに蠟燭の灯、網のような寝台に毛布一枚、ソーツ一枚という寒々したもの。

食つて寝る以外にすべもないこの簡易旅館に、それでも観光客をかもとするインド商人が来て土産ものを売るといので、かものなりに行く。買った菩提樹の実の数珠のいくつかあとでつくづく見ると珠にあけた孔のでたらめ加減。孔があつたら入りたいたいという気持ちもないらしい。どこの国にも土産ものの風土的規格があるみたい。これで中味の三倍くらいに包装をした羊羹でも売つてると立派な規格もの揃いとなる。がこちらには羊羹はない由。

はるかな地平線の彼方に陽が沈んだころ、何かで読んだ記憶があると数名の人たちがブツダガヤ大塔下の万灯供養の莊嚴を見に行く。帰つての話は出かけなかったものを相当羨ましがらせた。が、やせ我慢して寝てしまい、明日の夜明け前に宿願の大塔を拜まんものと疲れに負けて毛布を被つてしまふ。(つづく)

〈仏教書道〉昭和四十一年